



国民の森林・国有林

中部森林管理局

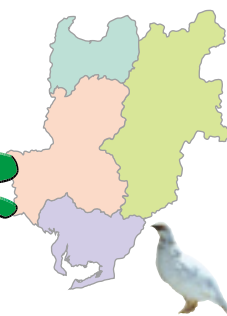
〒380-8575 長野市大字栗田715-5

☎050-3160-6513

<http://rinya.maff.go.jp/chubu/>

広報

中部の森林



城東小学校でマスクをしてお出前授業

小学生を対象に

「出前授業」を実施

(P4～5に関連記事)

主 な 項 目	○ 白馬岳山火事跡地調査報告会	P 2
	○ 各種現地検討会を開催	P 3
	○ 風景紀行「木曽越古道と三十三観音」	P 6

白馬岳山火事跡地調査報告会

【中信署】十一月二十七日、白馬岳山火

事跡地調査の最終報告会が中信森林管理署会議室で開催されました。この調査は、本年五月に、「花の名山」として知られる白馬岳小雪溪上部の高山帯において山火事が発生したことから、自然環境への影響等を総合的に調査するため、中信森林管理署が信州大学山岳科学総合研究所に委託して調査をしたものです。

植生回復状況については、高橋准教授から「草本群落では山火事のダメージがほとんどないが、燃えたハイマツ群落は枯死しており、林床植生もほとんどなかった。ただ、ハイマツ群落の焼失面積はそれほど大きくなかったため、山火事の生態系への影響は限定的であり、今後は焼失したハイマツ群落がどのように回復していくかを観察していく必要がある」との報告がありました。

続いて、地形・地質については、荻谷教授から「今後の地形変化予測として、短期的には、特に問題視する必要はなく、中期的（次シーズン以降）には、ハイマツ群落が回復せずに枯死することで裸地化することが懸念される。しかしながら、登山道への土砂流出は、山火事跡地内に土砂が存在しないこと、

山火事跡地と登山道との間に川があり、発生したとしてもそこで土砂が吸収されることから、問題視する必要はない」との報告がありました。

また、高山蝶については、中村寛志教授から「白馬岳山火事により延焼地域内に生息していた高山蝶のベニヒカゲとクモマベニヒカゲの幼虫、卵はほとんど焼死したと考えられるが、今回の調査から、食草（ノガリヤス・スゲ類）の生育及び成虫の山火事区域外からの移入を確認したことから、山火事区域内で再び生息し、個体数は回復すると推測される」との報告がありました。

最後に、ライチョウについては、中村浩志教授から「火災による被災地の面積はわずかであり、ライチョウが餌とする高山植物（ガンコウラン、ミネズオウ、オヤマノエンドウ）への影響はわずかであった。また、被災地内で採食となわばり見張り行動が観察され、被災地を含むなわばり行動が行われていた。さらに、被災地周辺のなわばり分布は、過去の調査結果とほぼ同様であった。これらのことと五月上旬と時期が早かったことも幸いし、今回の山火事によるライチョウへの影響はほとんどなかった。しかしながら、時期が進んだ段階で山火事が起きた場合は、影響がでる可能性が高く、北アルプス北部は、枯草群落が広く見られることから注意する必要がある」との報告がありました。



白馬岳山火事跡地調査の最終報告会の様子

これらの報告を受け、今後の山火事跡地の復旧及び山火事防止の普及啓発を含む白馬岳の適正な利用について、関係行政機関と連携を図りながら取り組むことを署長が表明し、閉会となりました。

平成二十一年度

第二回署長等会議

【企画調整室】十一月十二日～十三日、森林管理局等において署長等会議が開催され、十月に開催された局長会議、事業担当部長会議の内容を踏まえた指示が伝達されるとともに、本年度の業務運営に関する指示、打合せが行われました。

全体会議は、局庁舎の耐震工事の関係から、外部の若里市民文化ホールで実施され、冒頭、城土局長及び竹林次

長から①冬季作業に向けた安全対策の再確認、②国有林野事業改革をめぐる諸情勢、③農林水産省改革、④収入確保・予算執行の取組、⑤平成二十二年林野庁概要要求、⑥森林・林業再生の推進、⑦山地災害発生時の民有林との連携、⑧フォレストサポーターズ、⑨綱紀の粛正等について訓辞が行われました。

引き続き各部長からは、事業実行に当たっての具体的な取組、注意事項について指示が行われました。

特に今回の会議では、新政権下での予算編成など、従前とは異なる諸情勢を踏まえつつ、①地域住民に国有林が果たしている役割等を理解してもらう取組、②地域の林業の課題に応え、関係機関と協力して地域活性化に寄与する取組等が求められていることを強く認識し、事業に取り組むことを確認しました。



署長会議の様子

各種現地検討会を開催

造林事業現地検討会

【森林整備課】十一月九日、中部局においても低コスト造林を推進するため昨今注目を集めているコンテナ苗を主要なテーマとして造林事業現地検討会を実施しました。当日は、会場である中信森林管理署金松寺山国有林に、育成係長等の造林担当者のほか種苗組合関係者や県職員など約四十名が参加しました。

コンテナ苗は、植付作業の負担軽減や良好な初期生長により下刈等作業の省力化が期待でき、苗畑で生産した苗木よりも根元径が細く苗長も長いという特徴があるため、日頃苗木を見なれた参加者も初めは戸惑いを感じられた方もあったようです。

しかし、根の部分をほぐして観察してみたところ、細かい根がびっしり生えた良い苗であることが分かり、「数回根切りを繰り返していないと、このような苗木は作れない」等、苗木生産者から驚きの声もきかれました。苗の様子等を観察した後、署の育成係長等が中心となって宮城式植栽器具や唐鍬を用いてスギ・カラマツのコンテナ苗百本程度を植付しました。作業としては簡便ながら、実際に活着が良いかどうか、苗木の運搬方法や保管方法など意見がだされ、今後実践に向

けた課題として検討していくこととしました。

今回、視点の異なる立場から様々な意見交換がなされたことを活かし、引き続き中部局としての低コスト造林に取り組むこととしています。



コンテナ苗の説明

林政協議会木曽谷流域部会で 現地検討会を開催

【木曽署・南木曽支署】十二月一日、木曽地方事務所林務課及び木曽署、南木曽支署の関係者が参加し、現地検討会を開催しました。

これは、民有林・国有林の現地を把握するなかで、双方の取組や課題等を共有しながら連携を深めるため例年開催して



現地検討会の様子

いるものです。

当日は、王滝村の国有林内で、長野県西部地震被災地の復旧状況や天然更新施業の状況等を視察し、天然更新箇所では稚樹の発生状況等から更新が進んでいる様子に感心が寄せられました。

現地検討会後、場所を木曽署へ移し、民国連携事業の推進や獣害防除対策、林業事業体の育成等について情報交換を行い活発な意見が出され、有意義な検討会となりました。

今後もこういった取組により民有林・国有林それぞれの現地を把握する中で、密接な連携を図ることが木曽谷林業の活性化につながるものと感じています。

各地からのたより

治山研究発表会で 優秀賞を受賞

【岐阜署】十一月四～五日、東京都において第四十九回治山研究発表会が開催され、各局、各県及び民間から四セクションに分かれ計五十課題の発表が行われました。

中部局では当署から、斜面・溪流対策等の取組部門に「ソイルセメントを用いた治山ダムの構築」（板取川治山事業所）を発表しました。

表彰式での講評では、二年間に亘る様々なデータの集積とその分析が評価され、優秀賞を受賞しました。



表彰状を手に森課長と山田主任